



「不忘忠敬」



「大道無門」

## 作品の解説

### 1 良俗(りょうぞく)

健全な風俗あるいは、よい慣習の意。「公序良俗に反する」という言葉もある。

### 2 麗風(れいふう)

空が晴れて、太陽が明るくのどかに照る春に、麗らかな風が吹いている様。

### 3 楽業(らくぎょう)

あんきょらくぎょう 安居楽業あるいは同義語であんけらくぎょう 安家楽業という四字熟語の一部。「居に安んじ、業を楽しむ」あるいは「安居して業を楽しむ」の意。今の状況などに満足し、分をわきまえ、不満を持たず、心安らかに自分のなすべき仕事をする事をいう。あるいは、善政の行われていることの例えでもある。つまり、世が治まり生活が安定していれば、皆はそれぞれの仕事に励めるということである。

### 4 無(む)

『無門関』の中の有名な公案である。『無門関』は南宋の禅僧、無門慧開(1183-1260)が禅の大切な問題48則を選んで記述した書物『無門関』の第一則に採られている。禅の世界では、修行者は師の設けた関門を通らねばならず、真の悟りを得るには心を極め、心を越えねばならないとしている。そして悟りを得れば、山野草木の全ての精神を理解することができるという。

この公案は、一人の僧が趙州(778~899)和尚に問うた。「狗子に還って仏性有りや、無しや。(大意:犬にも仏性があるでしょうか)」と。趙州和尚が答えて、「無」と。また、茶事の一切をその無の境涯から抜け出してこそ、茶禅一味の心境にかなう茶道であるともいう。

### 5 寒巖一樹松(かんだんいちじゅのみつ)

雄大な松は、凍てつく巖しい岩上に、堂々と高くそびえているという意。同様に「巖松無心風来吟」あるいは「巖松無心」があり、雄大な松そのものは無の心で何も誇示せず、むしろその松の葉をさらさら鳴らす風こそが松の存在を大きくしている。人に言いかえれば、おごらずつつましく生きよということのよう。

### 6 廓然無聖(かくねんむしょう)

『碧巖録』の中の公案である。『碧巖録』は、北宋初期、雪竇重顕和尚が、先師たちの生き様の記録『景德伝燈録』1,700則の中から選んだ100則に頌古という韻文を加え、北宋晩期の圓悟克勤和尚がさらに自作の詩を付け加えた。

この公案は、梁の武帝が中国に到着した達磨大師に尋ねた。「私は仏塔を造り、経典を写させ、僧侶をもてなしてきた。このようにしてきた私にどんな功德があるか?」「功德などは、ない」と達磨は答えた。「ならば…仏教における最高の

真理は、何であるか。」「廓然無聖。」「空っぽで何もないということか。ならば、目の前にいるおまえは何者か。」「知らぬ。」と答えて、達磨大師は魏の国の嵩山少林寺に去ってしまったという。

7 飛天 (ひてん)

天衣てんねをまとい空中を飛行する天人のことである。エジプトやメソポタミアに生まれ、ギリシア、ローマへと展開する有翼の神々（勝利の女神ニケや恋の神キューピッドなど）に対して、東洋では翼をもたない飛天が創造され、その発生の地はインドとされている。

8 精励 (せいれい)

勉学や仕事などに精を出してつとめ励むことの意。

9 天翔 (あまかける)

神や人などの靈魂が空を飛び走ることの意。

10 散懷 (さんかい)

胸の内を噴き出すという意。あるいは、思いを晴らす。うさばらしをするという意。

王摩詰の六言絶句「散懷」というのがある。王維 19 歳の作「桃源行」からの「春来遍是桃花水 不弁仙源何處尋（春来っては遍く是れ桃花の水なれば 仙源を弁へず何れの處にか尋ねむ）」とある。このほか、王羲之の『蘭亭序』は、たいへん有名だが、蘭亭詩は余り知られていない。蘭亭修禊の宴のときに作詩された蘭亭詩は、修禊詩ともよばれる。王羲之の詩は「代謝鱗次。忽焉以周。欣此暮春。和氣載柔。詠彼舞雩。異世同流。乃攜齊契。散懷一丘。」というものである。

11 仙家樂事濃 (せんけらくじこし)

「仙人の家には、楽しいことがすぐれてゆきわたっている」という意。

12 心清意自写 (心清ければ、意自ら写る)

13 野草幽華 (やそうゆうか)

蘇東坡全詩集第 2 卷にある詩に「野草幽華各自春」という一行がある。その詩意は「野の草や谷間の花は、何れも春風に吹かれて居る」とある。

14 二山翁遺訓

神吾と偕に在れば 心正しく朗らかに 何事も工夫して 根気が肝要  
雅休謹録

15 松風有清音 (松風に清音あり)

松風には清らかな音がある。誰かれの対立を超え、清々しい松風と自己とがひとつになったところ。あるいは、仙境の松風は耳目に清々しく、人界には比較になるものがない。という意。

16 白雲作雨多如絮 紅葉驚風少似花 (白雲 雨なを作し 多わたに絮の如く、紅葉 風に驚き 少

しく 花に似たり)

白雲が雨を降らすことになれば黒雲となる。白く柔らかな綿のような白雲も、雨のために黒くて古く粗い絮のようになってしまう。また木々の青葉は、多少の風でも散らないが、紅葉すれば花と同様にいずれ枯れて風が吹けば、驚いたかに散ってしまうのは、少々花と似ている。

17 千歳恩讐両不存 風雲長為布忠魂 客窓一夜聴松籟 月暗楠公墓畔(千歳 恩 讐 両 不 存)

がら存せず、風雲長く為に忠魂を布く、客窓一夜松籟を聴く、月は暗し、楠公墓畔の(畔)

七言絶句『生田に宿す』(菅茶山 作)

長い年月を経た今では敵味方の恩讐も残っていないが、風雲はいつまでも忠魂を弔っている。たまたまこの地に一夜の宿をとり松風の音を聞いたが、楠公の墓のほとりのこの村では月の光も暗かった。

この詩は楠正成が戦死した生田村(現在の神戸市生田)に泊った時の感懐を詠ったものである。作者の菅茶山(1748~1827)は、備後国(現広島県福山市)の儒学者で漢詩人、自宅を黄葉夕陽村舎と名づけ私塾とし子弟を教育した。

18 月白風清(月白く、風清し)

初秋の非常に澄み切った夜空に皎々と輝く満月、どこからともなく吹く一陣の清風が木々の葉を鳴らす。

この句は、自然の美しさを詠んだばかりでなく、私たちは、金や地位、名誉、理屈、意地、さらには自分にもとらわれて生きている。このような執着物を一切捨てて、自由な境界になりたいことの境地をも表している。

19 不老門前日月遅(不老門の前には日月遅し)

『和漢朗詠集』の[祝]に、嘉辰令月歆無極。万歳千秋楽未央。(嘉辰令月 歆 び 極 り 無 し、万歳千秋 楽 み 未 だ 央 なら ず) 雑言詩 謝偃或英明。

長生殿裏春秋富。不老門前日月遅。(長生殿の裏には春秋 富 め り、不老門の前には日月遅し) 天子万年 慶滋保胤。

[古今] きみが代は 千代にやちよに さざれ石の いはほとなりて こけの むすまで 読人不知。[拾遺] よろづ世と みかさのやまぞ よばふなる あめが したこそ たのしかるらし 仲算。

にある。長生殿は中国唐代の華清宮の宮殿であり、不老門は洛陽城門で、不老門の名は「門をくぐると時がゆっくりと進む。」つまり「歳をとらない」という意味

である。この詩は、天子(玄宗皇帝といわれ、妃は楊貴妃とされている。)の万歳長久を、慶賀したもので、江戸時代から一般でも祝の句とされている。このため、ここでは、あえて長生殿ちやうせいどのと詠み「長生きしたあなた」と読み替えることで、皇帝への祝いの詩が、一般的な詩として身近なものとしている。

## 20 木枯の はてはありけり 海の音

池西言水いけにしごんすい (1650~1722) は江戸初期の奈良生まれの談林派の俳人である。彼は新しい先鋭的な俳人であった。33歳で京都に移り住み、その後、北越、奥羽、九州などを行脚した。

木枯らしも風、風に終りが無いが、枯らす相手がなくなった海で荒れ狂っていたにしても木枯らしとしての威風も効かず、無に等しい。

この木枯らしの句が評判になり、「木枯しの言水」と呼ばれるようになったのは有名である。

現代に於いても、山口誓子は、木枯らしを題材として、「海に出て木枯し帰るところなし」と詠んでいる。

## 21 吐故納新 (とこのうしん/故を吐き、新をいる)

古いものを捨てて、新しいものを取り入れることの意である。これは、『莊子・刻意』の「吹呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣 (ゆっくり大きく呼吸をし、老廃物を出し新しいものを取り入れ、熊や鳥のように大きく動くことが、長寿の秘訣である)」による。同義語には温故知新が、対義語には、古いしきたりや方法などを固く守ること、あるいは古いしきたりなどにとらわれ、融通のきかないことをいう、旧套墨守きゆうたうぼくしゆがある。

## 22 至道無難 (しいどうぶなん)

初祖達磨大師から数えて3代目の祖師、北周・隋代の僧そうきんに僧粲大師と仰がれる中国禅の鑑智禅師 (?~606) が撰した『信心銘』がある。信心不二の禅の極致を説く四言一四六字から成る韻文、一卷である。

『信心銘』冒頭の二句「至道無難、唯嫌揀択」は、人間の理想主義を否定して迷うことなく現実を生きよという意である。「至道は無難なり、唯だ揀択を嫌う。纔わづかに憎愛無くんば、洞然どうねんとして明白めいぼくなり。毫釐ごうりも差有れば、天地懸はるかに隔たる。現前を得んと欲せば、順逆を存すること莫かれ。」とある。

## 23 樂業 (わぎをたのしむ)

## 24 樂其業 (そのわぎをたのしむ)

## 25 雨読 (うどく)

四字熟語、晴耕雨読の一部。劉備と出会う前の諸葛孔明の生活は、晴れた日には畑を耕し、雨の降る日は本を読むというのんびりした農園的生活であったという。これが最も健康的で知的な生活であるということから、「田園で世間のわずらわしさを離れて、心穏やかに暮らすこと」の意。

26 天真 (てんしん)

自然のままで飾りけのないことあるいは、無邪気なことの意。

27 深山大澤実生龍蛇

(しんざんだいたく りゅうじゃをしょうず)

孔子が編纂したと伝えられる歴史書『春秋』の代表的な注釈書の一つ、<sup>しゅんじゅう</sup>春秋

<sup>さしてん</sup>左氏伝(通称「<sup>さでん</sup>左伝」)に、襄公 21 年、晋の宰相、叔向の母が「深山大澤。實生龍蛇。」とある。山深いところや大きな谷等では龍や大蛇のようなとてつもなく大きなものが育つ。つまり、傑物はそれなりの場所から出て来るという例えの意。同志社大学の創設者、新島襄は大学設立募金運動の演説の一節に、求める学生像を広く告知する際「<sup>おとそ</sup>凡大学たるものは偏頗狭隘たるへからず、<sup>もつとも</sup>无基礎を強固にし、規模を寛大に為し、深山大沢龍蛇を生すと申して、之を深山大沢となし、器量の太とき、志操の高き、目的の大なる人物を養成致し度きものにある。」と。

28 萬葉歌 (乎賀美河泊 久禮奈為尔保布 尔等米等買良之 葦附等流登 湍尔多湏良之 萬葉歌 雅休書)

おがみがわ くれなゐにほう おとめらし あしつきとると せにたたすらし  
(万葉集 卷 17・4021 大伴家持)

29 假名志らべ

いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむ うゐのおくやまけふこえてあさきゆむみしゑひもせず

いろは歌は、<sup>ねはんきょう</sup>涅槃經の中の「<sup>しよぎょうむじょう</sup>諸行無常(色は匂えど散りぬるを)、<sup>ぜしよめつぼう</sup>是生滅法(我

が世誰れぞ常ならむ)、<sup>しよめつめつ</sup>生滅滅已(有為の奥山今日越えて)、<sup>じやくめついらく</sup>寂滅為楽(浅き夢みじ酔ひもせず)」に基づいて作られたという説から、弘法大師(空海)が作ったといわれているが、その確証はない。

30 君こそは 山のたきつせ 山桜 心のまゝに ことしみましや 望東尼

(君来ずば 山の滝つ瀬 山桜 心のままに 今年見ましや)

<sup>もとに</sup>望東尼(1806~1867)は、勤皇派の尼僧で、幕末の女流歌人で、<sup>のむらぼうとうに</sup>野村望東尼ともい

う。夫と共に福岡の歌人大隈言道<sup>おおくまことみち</sup>に入門し、門人中の第一人者となる。歌集には、『向陵集』のほか、『上京日記』『姫島日記』『防州日記』の著がある。また、福岡郊外に設けた『平尾山荘』志士たちの隠れ家となり、長州の高杉晋作も一時難を逃れて潜伏した。

- 31 よろつよの しもにも かれぬ しらきくを うしろやすくも かさしつるかな  
後撰和歌集巻20・1368 賀歌哀傷にある藤原伊衡朝臣の歌。〔詞書〕女八のみこ元良のみこのために 四十の賀し侍りけるに 菊の花をかざしにをりて 「萬代の 霜にも枯れぬ 白菊を うしろ易くも かざしつる哉」
- 32 手紙Ⅰ 昭和20年11月6日(消印 昭和20年11月8日)  
差出先東京都渋谷区代々木初台町 幡代国民学校  
あて先：富山県東砺波郡太田村祖泉 横井善太郎、上田芳〔義〕松
- 33 手紙Ⅱ 昭和21年1月23日(消印 昭和21年1月28日)  
差出先 東京都目黒区下目黒2ノ4の1 平原社  
あて先 富山県東砺波郡太田村祖泉 上田義松
- 34 手紙Ⅲ 昭和21年1月28日(消印 昭和21年1月31日)  
差出先 東京都目黒区下目黒2ノ4の1 平原社 大澤雅休  
あて先 富山県東砺波郡太田村太田 安念金之介
- 35 手紙Ⅳ 昭和21年3月5日(消印 昭和21年3月6日)  
差出先 東京都目黒区下目黒2ノ4の1 平原社 大澤雅休  
あて先 富山県東砺波郡太田村太田 安念金之介
- 36 風信帖〔風信雲書 自天翔臨 披之閱之 如掲雲霧〕(風信雲書、天より翔臨す。之を披き之を閲するに、雲霧を掲ぐるが如し。「風のごとき、雲のごときあなたからのお手紙、それが天から舞い降りるが如くに目前に届きました。))

国宝「風信帖」は、王羲之の行書体で、日本の三筆の一人、空海(774~835)

が、天台宗の開祖である最澄(767~822)に宛てた手紙3通を集めて1巻としたものである。その1通目の書き出しが「風の如きお便り、雲の如き御筆跡が天から私の所へ翔臨して参りました」と始まることから、「風信帖」と呼ばれている。

- 37 孔子廟堂之碑〔國子祭酒楊師道等。偃玄風於聖世。聞至道於先師。仰彼高山。願宣盛德。昔者楚國先賢。荊州文學。猶鑄哥頌。〕(国子祭酒の楊師道等は、玄風を聖世に偃せて、至道を先師に聞き、彼の高山を仰ぎて、盛徳を宣べんことを願う。昔、楚国の先賢は、尚、風範を伝え、荊州の文学は、猶ほ歌頌を鑄ふ。「学校の長官である楊師道等は、老荘の道(道教)をこの世では抑えて儒教を孔子に聞き、かの高山を仰いで盛徳(立派な徳)を広く世の中にはっきりと示すことを願った。昔、楚の国は遠国であるのに、先賢はなお文教を教え、荊州は遠地であるのに、文人はなお祝い歌を教えたのである。))

孔子廟堂之碑は、唐の太宗が文教復興の第一歩として、武徳9年(626年)、長安の国子監の孔子廟を再建することを命じた。太宗に仕えていた政治家で書家の虞世南(558~638)は、その命によって記念の碑文を撰し書した。碑文は楷書体で、孔子の聖徳を讃えて歴代儒教の荒廃を述べ、唐王朝における孔子廟建立の意

義を説いている。

大道無門（だいどうむもん）

大道は四方八方に開放たれたところであり、どこからでも自由に入出りできる。そのため、何者にも縛られず、何の制約も受けない絶対自由の境地である。

大道無門 千差路有り 此の関を透得せば 乾坤に独歩せん

真理の世界、悟りの世界に到るには、どの道を択び、どこから入ればよいかなどと言うこだわりは不要であると。

不忘忠敬（忠敬を忘れず）

潘岳（247～300）は、西晋時代の文人で、大変な美貌の持ち主としても知られている。『世説新語』によると潘岳が弾き弓を持って洛陽の道を歩くと、彼に出会った女性はみな手を取り合って彼を取り囲み、彼が車に乗って出かけると、女性達が果物を投げ入れ、帰る頃には車いっぱいになっていたという逸話が残っている。潘岳は、死を悼む哀傷の詩文を得意とした繊細で美しいものである。

『文選』卷五十六・潘岳・楊荊州誄より

楊荊州誄

維咸寧元年，夏四月乙丑，晉故折衝將軍荊州刺史東武戴侯榮陽楊史君薨。嗚呼哀哉！夫天子建國，諸侯立家。選賢與能，政是以和。周賴尚父，殷憑太阿。矯矯楊侯，晉之爪牙。忠節克明，茂績惟嘉。將宏王略，肅清荒遐。降年不永，玄首未華。銜恨沒世，命也奈何。嗚呼哀哉！自古在昔，有生必死。身沒名垂，先哲所趨。行以號彰，德以述美。敢託旒旗，爰作斯誄。其辭曰：

邈矣遠祖，系自有周。昭穆繁昌，枝庶分流。族始伯喬，氏出楊侯。奕世丕顯，允迪大猷。天猷漢德，龍戰未分。伊君祖考，方事之殷。鳥則擇木，臣亦簡君。投心魏朝，策名委身。奮躍淵塗，跨騰風雲。或統驍騎，或據領軍。篤生戴侯，茂德繼期。纂戎洪緒，克構堂基。弱冠味道，無競惟時。孝實蒸蒸，友亦怡怡。多才豐藝，強記洽聞。目睇毫末，心筭無垠。草隸兼善，尺牘必珍。足不輟行，手不釋文。翰動若飛，紙落如雲。學優則仕，乃從王政。散璞發輝，臨軹作令。化行邑里，惠洽百姓。越登司官，肅我朝命。惟此大理，國之憲章。君蒞其任，視民如傷。庶獄明慎，刑辟端詳。聽參皋呂，稱侔於張。改授農政，於彼野王。倉盈庾億，國富兵彊。煌煌文後，鴻漸晉室。君以兼資，參戎作弼。用錫土宇，膺茲顯秩。青社白茅，亦朱其紱。魏氏順天，聖皇受終。烈烈楊侯，實統禁戎。司管閭闔，清我帝宮。苛慝不作，穆如和風。謂督勳勞，班命彌崇。茫茫海岱，玄化未周。滔滔江漢，疆場分流。秉文兼武，時惟楊侯。既守東莞，乃牧荊州。折衝萬里，對揚王休。聞善若驚，疾惡如讎。示威示德，以伐以柔。吳夷凶侈，偽師畏逼。將乘讎釁，席捲南極。繼襄糧盡，神謀不忒。君子之過，引曲推直。如彼日月，有時則食。負執其咎，功讓其力。亦既旋旆，為法受黜。退守丘壟，杜門不出。



游目典墳，縱心儒術。祁祁搢紳，升堂入室。靡事不咨，無疑不質。位貶道行，身窮志逸。  
弗慮弗圖，乃寢乃疾。昊天不弔，景命其卒。嗚呼哀哉！  
子囊佐楚，遺言城郢。史魚諫衛，以屍顯政。伊君臨終，不忘忠敬。寢伏床蓐，念在朝廷。  
朝達厥辭，夕殞其命。聖王嗟悼，寵贈衾襚。誅德策勳，考終定謚。  
群辟慟懷，邦族揮淚。孤嗣在疚，寮屬含悴。赴者同哀，路人增歎。嗚呼哀哉！  
余以頑蔽，覆露重陰。仰追先考，執友之心。俯感知己，識達之深。承諱切怛，涕淚霑襟。  
豈忘載奔，憂病是沈。在疾不省，於亡不臨。舉聲增慟，哀有餘音。嗚呼哀哉！